

演題名：牛の心奇形の一症例

発表者氏名：金谷 安利

発表者所属：滋賀県食肉衛生検査所

1. はじめに：滋賀県食肉衛生検査所は、県内1か所のと畜場を管轄し年間およそ8000頭の牛をと畜検査しており、日々、様々な症例に遭遇する。今回、心奇形を呈しながら、比較的長い月齢（21か月齢）まで飼育され、と畜時に顕著な解剖所見を示した牛の心奇形症例に遭遇したので報告する。

2. 材料および方法：

(1) 材料：症例は、黒毛和種、去勢雄、21か月齢で、食欲廃絶、削瘦、呼吸速迫、肺音粗励、胸垂浮腫、頸静脈怒張、心音強盛、下痢を呈し、令和3年7月21日に病畜として搬入された。生体検査にて、聴診で肺雑音、心雑音が聴取された。

(2) 方法：視診、触診による解体後検査を行った。また、解体後検査において水腫を顕著に認めため、「高度の水腫」として全部廃棄措置をとるべきか、判定するために水腫の状態を3日間観察した。なお、心臓については、検査室へ持ち帰り視診により観察を行った。

3. 成績：解体後検査において心拡大、ニクズク肝、肺水腫、消化管水腫、腹水貯留、皮下水腫を認めた。内臓については、水腫が高度であったため廃棄措置とした。枝肉については、水腫病変が一部に限局していたため病変部のみを廃棄措置とした。また、心臓について観察したところ、心室中隔欠損と心房中隔欠損の複合心奇形を認めた。

4. 結論：当該牛は、心室中隔欠損症と心房中隔欠損症を合併し、うっ血性心不全から各臓器に浮腫を生じ呼吸困難や下痢など各種症状を呈した。過去の調査では、牛の心奇形の発生頻度は調査対象により異なるが、牛胎子を調べた研究では0.7%、食用肉に処理された牛を調べた研究では0.2%、死亡または淘汰された子牛を調べた研究では8.7%と報告されている。また、牛の心奇形における奇形の種類と頻度についての調査では、心室中隔欠損が42.2%（1位）、心房中隔欠損が31.6%（2位）と報告されている。今回は、枝肉の水腫は一部に限局しており、全部廃棄とはならなかったが、と畜検査において水腫病変が全身に高度に及ぶ場合には全部廃棄措置の対象となるため、成長不良、心雑音等心疾患を疑う症例では、成育状態を観察しながら、早期出荷も検討すべきである。